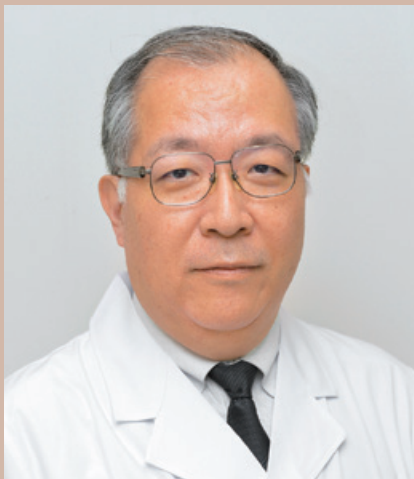


● 教室(診療科)の特色 ●

新生児/低出生体重児を扱うNICUではハイリスク分娩にも立ち会い、急変すれば直ちに蘇生処置等を行う周産期医療の中心的役割を担っています。さらに循環器疾患、神経疾患/発達障害、内分泌疾患、アレルギー/膠原病、腎臓疾患、血液/悪性腫瘍疾患、消化器疾患、心身症など「子どものすべて」を扱う体制を整えているのが特色です。また、それぞれのユニットは協力して感染症等のプライマリケアと救急対応を実践することを通して、大学病院の高度な総合医療を地域に還元することを目指しています。



芦田 明(あしだ あきら)教授(科長)

■専門分野

小児腎臓病学

■職歴

昭和63年 大阪医科大学附属病院研修(現 大阪医科薬科大学病院)

平成 7年 同 助手

平成16年 同 講師

平成31年 同 教授

■主な学会/専門医資格

小児科専門医/指導医、日本腎臓学会専門医/指導医

■研究課題

ネフローゼ症候群における酸化ストレスの関与の解明、各種腎疾患におけるミトコンドリア障害の関与
重症口タウウイルス感染症における腎結石形成機序の解明、溶血性尿毒症症候群の臨床重症度の解析
小児末期腎不全の疫学

● 診療科の概要・特徴 ●

新生児から成人になるまで(思春期)のダイナミックに変化するライフステージを対象にしていますが、小児科医の基本的視点を養成するために、新生児/乳児からの正常な身体的/心理的な発達過程を理解することを重視しています。入院は、一般病棟(65病棟)は34床ですが、複数の他病棟の個室を使用しています。その他、NICU9床、GCU6床を有しています。外来はすべての専門領域をカバーし1日平均患者数100-120名です。関連施設としてLDセンターを有し、連携して学習障害児などに対して学習支援方法の提案を行っています。

● 教室(診療科)指導医・上級医 ●

氏名(職掌)	専門医	参加学会
荻原 享(准教授)	小児科専門医/指導医 日本周産期・新生児医学会周産期指導医(新生児領域)	日本小児科学会、日本周産期・新生児医学会
瀧谷公隆(専門教授)	小児科専門医/指導医、血液専門医/指導医 日本小児栄養消化器肝臓学会認定医	日本小児科学会、日本小児血液・がん学会 日本小児臨床薬理学会
新田雅彦 (講師/救急医療部兼任)	小児科専門医/指導医、救急科専門医	日本小児科学会、日本小児救急医学会
島川修一(講師)	小児科専門医/指導医、小児神経専門医/指導医 日本てんかん臨床専門医/指導医	日本小児科学会、日本小児神経学会、日本てんかん学会
黒柳裕一(助教)	小児科専門医/指導医 日本周産期・新生児医学会周産期専門医(新生児領域)	日本小児科学会、日本周産期・新生児医学会 日本小児内分泌学会
山岡繁夫(助教)	小児科専門医 日本周産期・新生児医学会周産期専門医(新生児領域)	日本小児科学会 日本周産期・新生児医学会
岸 勘太 (助教/救急医療部兼務)	小児科専門医/指導医 日本小児循環器学会専門医/指導医	日本小児科学会、日本小児循環器学会、日本循環器学会 日本川崎病学会
尾崎智康(助教)	小児科専門医/指導医 小児循環器学会専門医、不整脈専門医	日本小児科学会、日本小児循環器学会、日本循環器学会 日本不整脈学会、日本小児カテーテルインターベンション学会 日本川崎病学会、日本成人先天性心疾患学会
安井昌子(助教)	小児科専門医/指導医	日本小児科学会、日本周産期・新生児医学会
松村英樹(助教)	小児科専門医/指導医、腎臓専門医/指導医 日本臨床腎移植学会認定医、日本小児感染症学会ICD	日本小児科学会、日本小児腎臓病学会、日本腎臓学会 日本小児腎不全学会、日本臨床腎移植学会 日本小児感染症学会、日本透析医学会

■ 連絡先：小児科(小児科学教室) TEL:072-683-1221

e-mail: akira.ashida@ompu.ac.jp(芦田 明)/kimitaka.takitani@ompu.ac.jp(瀧谷 公隆)

■ ホームページ：https://www.osaka-med.ac.jp/deps/ped/index.html

氏名(職掌)	専門医	参加学会
梶原美里(助教)	小児科専門医/指導医	日本小児科学会、日本小児栄養消化器肝臓学会 日本超音波医学会
吉田誠司(助教)	小児科専門医/指導医、漢方専門医 子どもの心専門医、心身医学専門医	日本小児科学会、日本小児心身学会
北原 光 (助教/中検兼任)	小児科専門医	日本小児科学会、日本小児神経学会、日本てんかん学会
小田中豊(助教(准))	小児科専門医・小児循環器学会専門医 胎児エコー認定医	日本小児科学会、日本小児循環器学会、日本小児胎児心臓病学会 日本超音波医学会、日本Pediatric Interventional Cardiology学会、 日本小児循環動態学会、日本心エコー学会、日本小児感染症学会
篠原 潤(助教(准))	小児科専門医	日本小児科学会、日本周産期・新生児医学会
卜部馨介(助教(准))	小児科専門医	日本小児科学会、日本血液学会、日本小児血液学会 日本小児血液・がん学会、日本造血細胞移植学会
河村佑太郎(助教(准))	小児科専門医	日本小児科学会、日本周産期・新生児医学会
藤井裕子(助教(准))	小児科専門医	日本小児科学会、日本小児腎臓病学会、日本腎臓学会 日本小児腎不全学会、日本臨床腎移植学会
蘆田温子(臨床研修指導医)	小児科専門医	日本小児科学会、日本小児循環器学会 日本循環器学会、日本成人先天性心疾患学会
大関ゆか(助教(時短))	小児科専門医/指導医、アレルギー専門医	日本小児科学会、日本アレルギー学会 日本小児アレルギー学会、日本小児感染症学会
杉田侑子(助教(時短))	小児科専門医	日本小児科学会、日本アレルギー学会 日本リウマチ学会、日本小児リウマチ学会

初期研修プログラムの特徴

新生児から成人になるまで(思春期)の年齢特性をもつ小児において、すべての内科的疾患を網羅しているのが小児科であり、総合医です。すなわちプライマリーケアから小児救急、そして大学病院らしい特化した専門領域までを研修できるようにプログラムが構成されています。一般小児科と新生児科の2つの診療科に分かれていますが、プログラムは合同で作成し運営しています。

研修内容と到達目標

小児科重点臨床研修プログラムでは2年目にNICU、大学病院において9か月にわたって研修するコースを設定している。また、これとは別に小児科臨床研修プログラムでは2年目に9か月あるいは6か月間、2か月間のコースも設定していて、個人のニーズに配慮されている。

研修内容

- ① 入院患者の診察と治療法・基本処置手技の習得
- ② 外来患者の診察・診断能力の習得
- ③ 画像診断の理解と基本手技の習得
- ④ 症例発表(症例検討会、研究会・学会発表)
- ⑤ 抄読会発表

到達目標

- ① 周産期から思春期までの各年齢の特殊性を考慮した診断能力を身につける
- 小児薬用量、食事療法、心身医学的治療法を理解する

- ② 基本的検査・処置手技を実践できる
乳幼児の採血・点滴、髄液検査、骨髄検査、超音波検査などを実践
- ③ 特殊検査の理解と実践
腹部エコー検査、心臓エコー検査、ビデオ脳波、心理発達検査、食物アレルギー負荷テストなど
- ④ 診療能力を向上させる
発疹性疾患の診断、けいれん時の処置、腹痛に対する診断と対応、先天性心疾患の診断と対応、超低出生体重児、極低出生体重児の評価と対応、小児救急疾患に対する診断と小児蘇生手技(PALS受講)の習得、小児膠原病・喘息の診断と管理、急性、慢性腎不全の管理、不定愁訴と心身症の診断と対応、小児糖尿病、肥満等の内分泌疾患の診断と管理、血液疾患、固形腫瘍などの診断と移植管理など
- ⑤ 社会医学・保健医療制度を理解する

評価方法

担当医となった受持患者について退院時要約、研修態度、診療技能について各ユニット長が各コース終了時に評価する。

週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土・日
8:00～9:00	症例検討会 入退院報告	抄読会 医局会	受け持ち患者の把握(8:30～9:00)			
9:00～12:00	病棟	一般外来 学生の指導	病棟	一般外来	病棟	週末日直 (2/月) 第2・4土および 日・祝日は休診
12:00～13:00						
13:00～17:00	病棟 学生の指導 総回診	病棟 学生の指導 チーム回診	病棟 学生の指導 チーム回診	病棟 学生の指導 チーム回診	病棟 学生の指導 チーム回診	合同勉強会(年3回) 各種研究会
17:00～17:30	患者申し送り					
17:30～19:00	各専門グループカンファレンス(下記参照)、指導医とともにふりかえり(1/月) 当直(1/週)					

各専門グループカンファレンス

新生児G 周産期カンファレンス(月曜日17:00～)
 血液G 小児血液・腫瘍グループカンファレンス(火曜日17:30～)
 幹細胞移植カンファレンス(金曜日 15:30～)
 循環器G 小児循環器合同カンファレンス(木曜日18:00～)
 心臓カテーテルカンファレンス(木曜日19:00～)

神経G 神経病棟カンファレンス(月曜日17:00～)
 消化器G 消化器カンファレンス(月曜日17:00～)
 膠原病・アレルギーG 膠原病・アレルギーカンファレンス
 (水曜日18:00～)
 心身症G 心身症カンファレンス(隔週月曜日17:00～)
 腎臓G 腎臓グループカンファレンス(火曜日17:00～)



小児循環器合同カンファレンス風景



血液・腫瘍グループカンファレンス風景



膠原病グループカンファレンス風景

後期研修プログラムの概要・特徴・研修方法・研修内容

本プログラムは小児科(科長:芦田明)および新生児科(科長:荻原享)の合同プログラムであり、「小児医療の水準向上・進歩発展を図り、小児の健康増進および福祉の充実に寄与する優れた小児科専門医を育成する」ことを目的とし、一定の専門領域に偏ることなく、幅広く研修します。専攻医は「小児科医は子どもの総合医である」という基本的姿勢に基づいて3年間の研修を行い、「子どもの総合診療医」「育児・健康支援者」「子どもの代弁者」「学識・研究者」「医療のプロフェッショナル」の5つの資質を備えた小児科専門医となることをめざします。また、日本小児科学会の定めた「小児科医の到達目標」の獲得を目指して研修を行います。到達度の自己評価と指導医からのアドバイスを受けるために、「小児科専門研修手帳」を常に携帯し、定期的に振り返りながら研修を進めます。

専門研修3年間のうち2年は大阪医科薬科大学病院一般病棟で感染症・呼吸器疾患・内分泌代謝疾患・心身症・血液腫瘍疾患・アレルギー疾患・膠原病・消化器疾患・腎泌尿器疾患・循環器疾患・神経疾患を担当医として研修し、周産期センターNICUで新生児疾患・先天異常疾患を6か月研修します。残る1年間は連携病院でそれぞれ担当医として研修します。3年間を通じ、外来での乳児健康診査と予防接種などの小児保健・社会医学の研修と救急疾患の対応を担当医として研修します。なお、重症心身障害児医療は、大学附属病院研修期間中に高槻市立療育園、西宮市立わかば園、藍野療育園で学ぶことができます。これらの研修を通じ、新生児から幼児期、学童期、思春期に至る小児および小児期からの疾患でキャリアオーバーした成人に至るまでを対象に健康小児の検診健康診査から小児救急医療にわたる小児に関する総合診療を習得することを目的としています。

また、日常の臨床から得られる様々な疑問を深く掘り下げ、臨床研究が可能なレベルまで指導を受けることができます。具体的には、学会報告や症例報告、臨床研究から論文作成を積極的に行います。小児科専門医は初期研修修了後3年の研修で受験可能であり、その到達目標を達成することを目的としています。

研修内容

NICUを含めた複数のユニットをローテートすることができる。

- 大阪医科薬科大学周産期センターは新生児医療黎明期の開設以来30年を越える歴史があり、現在では、400g未満の症例を含めて、在胎週数28週未満、出生体重1000g未満の超早産超低出生体重児の生存退院率は95%近くに達し、大学病院付属の周産期センターとしては、全国屈指の施設の一つである。日本周産期新生児医学会の新生児専門医基幹施設であると共に、OGCS(大阪産婦人科相互援助システム)の基幹病院でもあり、胎児診断症例の母体搬送も数多い。対象疾患は、新生児外科症例を含めほぼ全てを網羅し、幅広い症例を経験できる。
- 循環器疾患領域では、年間100件以上の先天性心疾患の手術件数があり、小児心臓血管外科医とともに周術期管理を行っている。また胎児心臓病超音波検査施設に認定されており、数少ない小児カテーテルアブレーション治療が可能な施設でもある。先天性心疾患の診断、病態把握、治療、周術期管理、川崎病の診断と急性期治療、小児心不全治療、小児不整脈の診断と治療を理解・習得し、川崎病の冠動脈エコー検査、先天性心疾患のエコー検査、心臓カテーテル検査などについて習得することができる。
- 消化器領域では腹部疾患全般において、腹部X線、超音波、CTなどによる画像診断の学習ができる。また、乳児肥厚性幽門狭窄症の診断と治療や、腸重積の診断と超音波整復は古くから当施設では実施している。同時に急性腹症に対する診断と治療、炎症性腸疾患や慢性肝疾患に対する超音波、消化管内視鏡、肝生検なども施行しており、炎症性腸疾患、硬化性胆管炎、代謝疾患を含めた慢性肝胆膵疾患についても経験することができる。人工補助肝療法や血球除去療法などの浄化療法も必要に応じて施行している。また、当科では超音波、消化管内視鏡、肝生検なども小児消化器医自身が全例施行し、現在も超音波専門医、指導医、小児消化器病専門医が診療に従事しており、種々の疾患が経験でき、画像診断などの手技についても修練できる。
- 血液・腫瘍領域では、白血病・悪性リンパ腫を含む各種血液疾患から固形がん全般にわたる小児血液腫瘍領域すべての疾患について診療を行っており、小児血液腫瘍医としての総合的な研修が行える。日本小児がん研究グループ(JCCG)に属し、最新の治療研究を行うように努めている。また血液内科と共に非血縁者間造血幹細胞移植施設・骨髓採取施設に認定されている。日々の診療により、骨髓穿刺、骨髓生検、腰椎穿刺、髄腔内注射、中心静脈カテーテル挿入などの基本手技を習得すること、輸血療法、抗がん剤治療、造血幹細胞移植、免疫低下時の感染症治療などの知識を習得することが可能である。
- 神経疾患領域では、小児期に発症する神経疾患全般、発達遅延をきたす症例、学校や日常生活に困難をきたす発達障害の症例を診療しており、広い領域を網羅している。小児神経専門医認定施設・

てんかん学会認定研修施設でありスタンダードな診療技術を習得できる。特にけいれん性疾患においては、ビデオ脳波同時モニタリングを用いた脳波分析による診断法を習得できる。またLDセンターでは学習障害の診断や診療を10余年にわたって行っており、小児の高次機能分析の最先端を学べる。研修で経験した症例を論文化することにも重点をおいており、アカデミックな研修環境を目指している。

- アレルギー疾患領域では小児気管支喘息や、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎等を診療している。小児科診療においてアレルギー疾患は感染症について多いcommonな疾患である。気管支喘息ではモストグラフを含む呼吸機能検査を、食物アレルギーでは食物負荷試験や緩徐型免疫寛容誘導(いわゆる経口減感作療法)を施行しており、診療ガイドラインに基づき、精密かつ個々の状況に合った診療・管理指導を取得できる。
- 小児リウマチ性疾患(若年性特発性関節炎・SLE・若年性皮膚筋炎など)領域では、希少疾患であり成人とは異なった病態生理を示すため、基点病院として専門診療を行っている。慢性的な全身疾患かつ思春期発症が多く、内科・眼科・皮膚科・整形外科・リハビリテーション科等他科および心理士・ソーシャルワーカー等と連携した綿密な診療を習得できる。小児の関節エコーは専門医指導のもと読影・実技を行う事ができる。
- 腎臓疾患領域では、検尿沈査の見方から腎生検に至るまで、正確な診断を下すための検査ツール(検尿沈査の読み方、腎臓を観察するための腹部超音波検査、MRIやVCUG、DIP、CT、などレントゲン検査、DMSAシンチやレノグラムなどの核医学検査、腎生検、生検組織標本の病理診断など)を的確に選択、実践し、結果を正確に判読する。この検査結果に基づく正確な診断をもとにエビデンスに基づく治療法を選択している。末期腎不全患児に対しては在宅腹膜透析管理や腎移植など各関連科と協調し腎代替療法を導入している。これらの手技、診断のアルゴリズム、治療法選択が習得できる。
- 心身症疾患領域では、起立性調節障害の診断に必要なフィナブレース起立試験検査法や、自律神経機能評価法を習得できる。臨床心理士による治療介入もしており、心理テストの解釈や心理療法の習得もできる。また、軽度発達障害の診療および治療法についても習得できる。他に関西医大とともに野外キャンプによる不登校への治療介入も行っており参加もできる。
- 内分泌代謝疾患領域では、間脳・下垂体疾患、甲状腺疾患、副腎疾患や1型および2型糖尿病、肥満症、拒食症、夜尿症などの診療を行っている。生活習慣病に関しては行政と連携し検診事業に参加できる。また、1型糖尿病のサマーキャンプに参加でき、病態の理解に加え、患者家族、学校関係者、多職種医療関係者との交流を経験し、全人的医療を学ぶことができる。糖尿病、肥満症については小児科では数少ない学会認定教育施設となっている。



消化管造影検査



腎生検



NICUの風景

関連診療科との定期的な症例検討会など

- (ア) 幹細胞移植カンファレンス(毎週金曜日 15:30~)参加者:小児科医師、血液内科医師、リハビリ科医師、口腔外科医師、病棟薬剤師、理学・作業療法士、病棟看護師、リエゾン看護師
- (イ) キャンサーボード(毎月第1木曜日 18:00~、症例に合わせて)参加者:小児科医師、化学療法科医師、呼吸器内科医師、消化器内科医師、関連各外科医師、放射線科医師、病理部医師、がん専門薬剤師
- (ウ) 小児循環器合同カンファレンス(毎週木曜日18:00~)参加者:小児科医師、小児心臓外科医、麻酔科医、臨床工学士、ICU、病棟看護師、高槻病院小児科医、関西医科大学小児科医
- (エ) 神経カンファレンス 参加者:大阪医科薬科大学小児科研修連携施設
- (オ) 膠原病抄読会(2回/月、火曜日夕方) リウマチ・膠原病内科と小児科医師の合同抄読会
- (カ) 免疫・アレルギーカンファレンス(第4火曜日19:00~)参加者:大阪医科薬科大学関連病院小児科医師、呼吸器内科医師、耳鼻科医師
- (キ) 心身症自律神経カンファレンス(1回/年)参加者:大阪医科薬科大学小児科関連施設医師、臨床心理士

ハンズオンセミナー

腹部超音波検査、消化管内視鏡検査、心臓超音波検査、心臓カテーテル検査、アレルギー負荷試験、関節超音波検査、骨髄穿刺、腎生検、腰椎穿刺、内分泌負荷試験、起立負荷試験、周波数解析による自律神経機能評価

研修内容と到達目標

NICUを含むすべてのユニットをローテートして、総合医である小児科医としての診療技術を向上させる。小児科専門医を取得できる症例を経験するだけでなく、症例発表を行い、論文作成を行う。

取得できる専門医

小児科専門医、小児神経専門医、てんかん専門医、消化器病専門医、内分泌専門医、リウマチ専門医、血液専門医、小児血液・がん専門医、腎臓専門医、感染症専門医、アレルギー専門医、新生児専門医、臨床遺伝専門医、小児循環器専門医、漢方専門医、心身医学会専門医、超音波専門医、内視鏡専門医、救急専門医

先輩医師のコメント



西本 聡美 2019年度レジデント 多彩な専門グループで学べる 環境が決め手でした

私が当院小児科での研修を希望した1番の理由はたくさんの専門グループがあることです。この1年間はそれぞれの専門グループを2か月ずつローテートし、様々な疾患をもつ子供たちの診療に携わることができました。大学病院ならではの希少な疾患も多く小児科を始めただけの私にとって難しい経験もありましたが、上級医の先生方にいつでも相談できる環境で、日々学ぶことがたくさんあります。専門グループが多い当院小児科ですが、グループ間で意見交換する機会も多く、診断がまだわからない疾患に対して、専門家の先生方が異なった側面から原因を突き止めるためのアプローチをしている場面を肌で感じることができます。私自身は1年間のローテートを経て、消化器疾患に興味を持ち、専門グループとしては消化器グループに進むことに決めました。

また、大学病院としては珍しく、感染症など小児科の一般的な疾患についても診療の機会が多いことも当院小児科の特色だと思えます。これらの疾患の子どもたちを診療できることは、小児科医として歩み始めたばかりの私たちにとって、救急対応や普段の診察に直結していることが実感できる貴重な場面だと思えます。

当院小児科での研修を開始してまだ1年ですが、医局や病棟の雰囲気はとても暖かく、毎日楽しく研修しています。みなさん、大阪医科薬科大学小児科でこどもたちのために一緒に働きましょう。



萱谷 理秀 2020年度レジデント 指導体制や専門分野の広さ 医局の雰囲気の良さ

私は初期研修中に血液内科か小児科のどちらに進むか迷っていましたが、疾患だけでなく発達も見ることができるとに興味を持ち小児科を選択しました。また、実際に当院小児科での初期研修を経験し、大きな魅力を感じたため入局いたしました。当科は専門分野ごとに8つのグループがあり、グループごとに専門性の高い症例を見ることができ、その一方で、一般的な症例も多くどのグループを回っていても一般小児も学ぶことができました。最近是一般小児の初期対応を行える時間外当番制度が始まり、上級医から細やかなフィードバックがあるため、どのように診療を行うべきなのか非常に勉強になりました。また、診療業務とは別に研修医やレジデントのための各グループの先生が勉強会を開いてくださることがあり、外してはいけないポイントや注意すべきことなどを教えていただけます。

医局に関して言えば、出身がさまざま個性豊かな先生方が多いお陰で雰囲気が非常に良く、仕事のことは勿論、それ以外のことも気軽に相談できると思えます。複雑な病態や珍しい疾患でディスカッションが必要であっても医局内で完結できることが多く、フットワークが非常に軽いため迅速に対応されています。上級医の先生方のこういった姿を見ていると、そうなれるように精進していかないといけないと意欲が湧いてきます。

ほかにも当科の魅力はありますが、紙面には書ききれません。是非一度見学に来てください。来ていただければ魅力を感じていただけると思っています。お待ちしております。



久保 敦子 2020年度レジデント 私の夢は小児科医になること

私は、小児科医になると学生の時から決めていたため、大阪医科薬科大学の小児重点コースで初期研修をさせていただきました。大阪医科薬科大学の小児科は腎臓班、循環器班、血液班、神経班、消化器班、心身症・内分泌班、膠原病班、新生児新生児の8のグループで構成されています。初期研修の期間にこれらのグループを順に回ることで、大学病院でしか経験できないような珍しい症例を専門分野に偏りなく経験することができました。また、平日の午後に予約時間外の患者の外来診療を上級医の指導の下でさせていただく機会もあり、大変勉強になりました。ほとんどの初期研修医は外来診療をする機会は少ないため、後期研修に進むに当たり外来診療の経験は貴重であると考えます。

初期研修を終え、後期研修医として大阪医科薬科大学の小児科医局に入局を決めた理由は、専門グループが多いこと、他、医局の先生方や病棟・外来看護師さんたちの雰囲気がとても良く動きやすく感じたことも大きいです。スタッフ同士とても仲が良く、グループを越えて診療内容の相談をしたり、入院中の子ども様子を看護師さんから報告を受けたりなど情報共有をしやすい環境となっています。

小児科が大変そう、病気の子どもを見るのは辛いと敬遠されがちですが、病気で苦しんでいた子供が元気になって退院していく姿を見ることはとてもやりがいを感じることができます。入院中の子どもも明るく治療に励んでいるため、医療者側が元気をもらうこともたびたびあります。小児科に少しでも興味のある方は一度見学にいらしてください。

参加学会

日本小児科学会／日本未熟児新生児学会／日本小児循環器学会／日本小児神経学会／日本小児血液・がん学会／日本小児アレルギー学会／日本小児腎臓病学会／日本小児内分泌学会／日本小児感染症学会／日本小児栄養消化器肝臓学会／日本小児心身医学会／日本小児臨床薬理学会／日本小児精神神経学会／日本小児救急医学会／日本小児リウマチ学会／日本小児放射線学会／日本周産期・新生児学会／日本てんかん学会／日本肥満学会など

大学院における研究活動

教育・研究指導方針

臨床的現象に即した問題提起と、基礎的根拠に立脚した問題解決への挑戦。

小児科には内科と同じようにほぼすべての領域を、しかも単独の科でカバーしている上に、特殊な新生児の領域も含んでいる。発達期にみられる臨床課題をテーマにして、指導医のもとに研究計画立案し、実行するように指導している。発展すれば国内外の研究施設との交流も行なっている。

現在の研究テーマとその概要並びに展望

① 芦田 明、松村 英樹、藤井 裕子／小児腎臓学研究

フリーラジカル関連腎臓疾患の病態解明

ネフローゼモデルラットや急性腎不全モデルラットを作成し、各種酸化ストレスマーカーの測定やミトコンドリアの質的障害の比較し、発症機序を解明している。

② 瀧谷 公隆／小児栄養学、ビタミン学研究

③ 脂溶性ビタミンの生体内濃度調節の解明

④ 母乳分泌の調節機構

授乳時期により母乳成分構成は異なるが、乳腺細胞における脂質、タンパク質合成機構は不明である。我々は乳腺組織において、母乳分泌に関与する遺伝子群を同定した。現在、その遺伝子群の発現機構を検討中である。

③ 島川 修一、北原 光／小児神経学研究

学修困難をきたす小児の病態解明：読み書き困難、漢字書き困難、計算困難、板書が困難、書字の乱れなど学修困難状態は様々あるが、これらを認知的に病態解明している。

超早産児の認知機能：超早産児は知的水準に問題がなくても、一般と比べ認知機能に特徴を有し、学修困難をきたす児が多い。これらを認知的に病態解明している。

痙攣性疾患の長期経過観察研究：熱誠痙攣など予後の良いと考えられる疾患でも、実際の経年的な経過はよくわかっていないことが多い。痙攣性疾患をきたした児の経年的な経過を調査する多施設共同研究を行っている。

④ 荻原 享、山岡 繁夫、安井 昌子／新生児学研究

早産児の主要な死亡原因の一つである新生児慢性肺疾患を対象として、多方面から研究を続けている。これまでの成果はNelsonの小児科学、Averyの新生児学などの教科書やLancet等の総説に数多く引用されている。最近、細胞内活性酸素発生源として最も重要なNADPH oxidase、炎症収束性脂質メディエーター、非ステロイド性レセプター修飾物質およびprostaglandin F2 a receptor阻害剤などの効果を検討している。また、早産と腎機能、早産児の運動発達についても研究を進行中である。

主なる関連病院

大阪労災病院／市立ひらかた病院／済生会吹田病院／済生会茨木病院／高槻赤十字病院／清恵会病院／北摂総合病院／八尾徳州会病院／第2協立病院／第1東和会病院／田中病院／サンタマリア病院／西宮市立わかば園

⑤ 梶 恵美里、余田 篤／小児消化器病学研究

③ 小児炎症性腸疾患の病態と治療法

④ 小児消化管の粘膜免疫と炎症

⑤ 小児炎症性腸疾患の超音波機器を使った早期診断と機能評価

⑥ 超音波機器を使った消化管粘膜の機能解析

⑥ 吉田 誠司／心身症・自律神経研究

心身症・自律神経グループは、子どものこころの診療方法の開発について心身両面から研究している。とくに、ハイテク装置を導入した脳循環、体循環のリアルタイム解析と生体リズムや生体ゆらぎを用いて、子どものこころの状態との関係を明らかにしている。

⑦ ト部 馨介、瀧谷 公隆／小児血液腫瘍学研究

腫瘍細胞における細胞死誘導機序解析

急性前骨髄球性白血病患者におけるレチノイン酸薬物動態、白血病及び神経芽腫細胞株における新規レチノイド化合物のアポトーシス誘導機序やエピジェネティクス機構の解明などを中心に臨床研究／基礎研究を進めている。

⑧ 岸 勘太、尾崎 智康、小田中 豊／小児循環器学研究

③ 小児肺高血圧症に対する薬物治療の効果（高肺血流量型肺高血圧、慢性肺疾患、Down症候群）

④ 小児起立性低血圧、肥満児、川崎病患者における血管内皮機能の検討

⑤ 川崎病罹患患者の動脈硬化の検討およびビタミンEの内服効果の検討

⑥ 小児心不全患者におけるビタミンDの測定

⑦ 川崎病急性期におけるバイオマーカー測定およびその臨床的意義の検討

⑧ 川崎病急性期における心筋機能障害の心エコーによる評価（2D speckletrackingをメインに）

⑨ 小児肺高血圧症に対する左室機能の心エコーによる評価

⑨ 大関 ゆか、杉田 侑子／小児膠原病・アレルギー学研究

③ 小児リウマチ性疾患および小児アレルギー性疾患における心理社会的因子が及ぼす影響とストレスマネジメントの有用性

④ 小児リウマチ性疾患における関節エコーの有用性

⑤ 小児リウマチ性疾患における新たなバイオマーカーの検討

⑥ 小児食物アレルギー患者における免疫寛容のメカニズムと治療への応用

⑩ 黒柳 裕一、高谷 竜三／小児内分泌・糖尿病研究

③ 小児肥満症の疫学

④ 肥満小児のbody image

⑤ 身長による肥満度の補正

⑥ 超音波による高尿酸血症の関節評価

⑦ 肥満・糖尿病に対する効果的な医療面接（動機付け面接）